

好ゴ母
きブ対
放り魔
題ン忍
犯がの
し群熱
尽がれ
くりた
す乳肉
に

対魔忍不〇火

~ゴブリン敗北CG集~

「はあ、はあ……っ、キリがないわね
まったく……どれだけ増えたのよ……！」

洞窟の奥深くでゴブリンを退治する対魔忍、水城 不知火

彼女に依頼がきたのは二時間前――。

ある組織の実験場から逃げ出した魔物、その1体である
ゴブリンが仲間を増やしこの洞窟を棲み処にしていた。

組織は駆除を試みたが、持ち出された薬の力もあり返り討ちに遭う。
どうにもならなくなった組織は対魔忍へ依頼し

実戦経験が豊富で最も実力のある不知火が駆除を請け負うこととなった。

若手の対魔忍たちは他の魔物の駆除にあたっているため
単独での任務になったが、ベテラン対魔忍の不知火さんならば
ゴブリンの駆除など簡単にやっける 誰もがそう思っていた。
しかし、ゴブリンの戦力は想像を遥かに超えていたらしい――。



「まさか…こんなになんぞ増えてるだなんて…
読みが甘かったわね洞窟の奥へ来すぎたわ…
ここは一度撤退して…ッ！、しまった！」

岩の陰に隠れていたゴブリン数匹が飛びかかり
不知火を押し倒した。抵抗するが複数のゴブリンに四肢を
押さえつけられ、さすがの不知火も身動きが取れなかった。

そしてゴブリンはブヒブヒと鼻を鳴らし
獲物を捕らえたことに歓喜するのだった。



「んっっっ、気持ち悪い…本当に不快だわ…！」

グッ
ぞ

「まさか…こんな下級妖魔のゴブリンに
捕まってしまうなんて…」

ぐん

ゴブリン

ぐん

ぐん

「でも…攻撃してくる気配は無いわね…
何を考えているのかしら」

ぐん



下級妖魔であるゴブリンに捕らわれるという想定外の事態と
ゴブリンの臭い唾液や体臭が鼻につき、不快感を露わにする不知火
そんな不知火の前に群れのリーダーであるゴブリンが姿を見せる



「あら、あなたは少し様子が違うわね
群れのリーダーってところかしら」

「ほおお、女か若くはナイが
ウマそうな肉がついてい
るよ、よかったゾお前たち」

「生憎だけれど、あなたの仲間は
殆ど始末したわ。残ったのは
ここに数匹だけ」

「私一人を捕まえるのに随分な
戦力を使ったようね」

「なに、心配要らナイ
減ったら増やせばいい」

「ちょうどいい母胎が
手に入ったんだからなア」

「人の言葉を理解しているとはいえ所詮は下級の小鬼ね
すぐに首を刎ねてあげるわ」

「グエー……ッその強気な態度がいつまでもつかな?」

お前がぶら下げてるデカイチチ肉を味見してヤル♪

お前がぶら下げてるデカイチチ肉を味見してヤル♪

「そうだな、まずはお前がぶら下げてるデカイチチ肉を味見してヤル♪」

「おおっ、「リ」や良い
最高の乗り心地だ♪」

スグに食糧にするには
惜しい人間♪

家畜にする♪

「何かを命令している……？
より力をかけ始めた」

抵抗デキナイとらた
押さへる回

カクカク…

「このエナリン達…あなたの
命令には従うのね」

カクカク…



「ゴイツら、俺が操ってル
実験場で盗んだ道具
賢い俺だけ使える」

「……そう、道理で統率が
とれているワケね」

「聞いてないわよそんなの……
確かに、手足を失っても噛みつきとして
きたわね……。死を恐れないゴブリンが
こんなにも厄介だなんて」

「オマエ達人間が来るおかげで
仲間を増やせるオレが操る♪」

「オマエはたくさん産めそうな
イイ母胎ダ 大事に使ってやる♪」



「グエッ、熟れた乳の肉は柔らかいな♪」

「前のオンナとは比べものにならないほどデカイチチ♡」

「うっ」

「うっ」

「エロエロマコシだけデカければ何匹でもしゃぶりつけそうだな♪」

「おっ」

「おっ」

「おっ」

「うっ」





お
お
お

お
お
お

お
お

お
お

お
お

お
お

お
お

お
お
お

お
お

「ふふっ、「こんな」とで私をどうにかしたいのかしら
下級の小鬼らしい愚かな考えね」

「オマエ、チチは出ないのか？」

「おっぱいが欲しかったの？
それは残念ね、もう出ないわよ」

「こんなにデカイチチを
持っているのにか？」

「おっぱいは子供のためのものよ
あなた達にあげるものじゃないわ」

「そうか、グロウマ
ならばアレスを使ってヤル」

「そ、それは…?」

ズズズ

「コレは俺が実験中ヨウから逃げる時
盗んだモノ。オムナにしか使えない」

ズズズ

「追ってきた人間にオムナがいたから
コレ使っちゃったら壊れた」

ズズズ

「そのオムナ使って仲間増やした」
「オマエは耐えられるか?」

「か…、体が熱い…っっ、胸…
おっぱいがジンジンするっっっっ！」

「おっそろしく効果が酷デキたようだなア
さア、またデカイチチを揉んでやるヨ」

「ダメ…っ、来ないでええっっ！」



「…♡、ひらっ、ヒィ…ッ♡」

「どうだア、チチをひり出しタ気分はア？」

「これくらいは…ッ、何ともない…わ…
必ず首を刎ねてあげるから覚悟しなさい…っ…♡」

ヒィ
ヒィ
ヒィ

ヒィ
ヒィ

ヒィ

ヒィ
ヒィ

ヒィ
ヒィ

「グロ…ッ、威勢がいいオンナダ、
オマエはまだまだ楽しんでるダ」

ヒィ
ヒィ

「グヒヒ、クスリのおかげで体の自由が効かんのだ回」
「オマエがどれほど強くても家畜も同然、
繁殖袋の仕込みには丁度イイ♪」

オマエ

オマエ



「クンッ、クン…雌のニオイが漂ってるなァ
クスリで発情したカ？そレとも生来の淫乱カ…♪」

「っ…、好き放題…言ってくれる…わね！」

「だかまは…、「ツチの肉を媚薬漬けにシテやる」

「ほおオ……♪媚薬のせいか、またチチが張ってるんですけどやないか？
今度はさっきよりもキツく搾ってやル」

「く……っ、しっ……いわね……！」

「そんなにおっぱいが恋しいのかしら……っ？」

「はあ……、はあ……っ、これなら
なんとか耐えられるわ……」

「グッ」

「グッ」

「でも無駄よ あんな媚薬じゃ
私は堕ちないわ」

「ラム…、絶頂する瞬間に快楽を逸らしているナ…」

「ええそうよ だからどんな快楽責めも私には効かないわ。それに、もう使い切ったんでしょ？媚薬」

「残念だったわね こんなおばさん相手に媚薬を使い切って墮とせないなんて」



「ソレはどうかな？
歯番だぞ、オマエ達」

「ウキヤミッーウキヤミヤマ
「ママ

「ゴブリンが群がってきた……
何をするつもり？」

「……」

「グッ
グッ
グッ」

「グッ」

「グッ」

「グッ
グッ
グッ」

「グッ」

「グッ
グッ
グッ」

「グッ」



「ああん♥ダメえ♥おっぱい♥
おばさんおっぱい弱いのお♥♥」

「そりゃよお♥そのまま♥
おっぱいしゃぶりすぎなせう♥♥」

「そ、そんなに激しくっ…ウっっ♥
おっぱい吸われたらあっ♥♥
おばさん イッちゃっ♥♥」

「くっ、ゴブリンの小さい口が
乳首を執拗に狙ってくる…っ♥」

「でも、これを耐えきれば…っ♥
媚薬の効果が切れる…っ♥」

「それで…っ♥奴らから
武器を奪い返して♥
反撃に転じるっ…っ♥」

「だからあゝいいわっ、そのまま♥
おっぱい好きなだけしゃぶらせてあげる♥」

おっぱい

しゃぶり

くっくっ
くっくっ

しゃぶり

おっぱい

三十分後——

「よ、ようやく満足したようね……
強く吸いすぎなのよ……」の化け物……♡
知性のカケラもないじゃない……♡」

「おっぱいに飢えた赤ん坊達に
散々しゃぶり尽かれたけど、
何とか耐えられたわ……」

かたお

ん

「……んっ♡んぷっ♡すっかり
油断しているわね……」

ん



「はあ…♡はあ♡
んっ♡…んぶんんっ♡」

「おかしいわ…媚薬の効果切れぬい
…それどころかさっきよりも強くなってる…っ♡」

「あなた達…っ、
いったい…何をしたの?」



「オマエのデカイチチ肉をずつとしゃぶってただけだガ？」
「ただ、オレ達の唾液を浴びせてやったがナ」

「唾液ですって…!?」
「まさか…ッ…」

「グヒヤヒヤ♪気付いたようだな女ア
さっきの媚薬ハ俺の体液から作られたモノ」
「アレはスグに効くガ効果は弱い」

「だが俺たちノ原液はさっきの媚薬とは
比べモノにならないゾ」
「最初の女はスグに繁殖袋になってくれたゾグヒヤ♪」



「ひいっ☆おひいいいいいいいっ♡♡♡♡♡
やめっ、噛むのダメえええええ♡♡♡」

「なんだ？随分と必死だな
チチ食いつかれるのがそんなにイイのか？」

「ちょっと撫でられただけでも
イっちゃいそうなのに……
こんなの無理よおお☆」

なんとか逃げようとするが
その度に乳がぶるんっ、と揺れて
ゴブリンをイタズラに刺激してしまい
逆効果となった

目の前の獲物を逃すまいと
乳を啜え、何度も歯を立ててきた

「ひぐらわっーりよ、両方っ♡
がぶがぶっっっっん☆!？」



ヒヒッ、仕込みも終わった

「あっ♡あへえ~~~~~☆☆」

「この女はもっと使えやうだ
」のちも黒おし持いのラン

ドクドク
ドクドク
ドクドク

ドクドク
ドクドク
ドクドク



「……デカイ乳ばかりで
ソチがマダだったナア」

巢に持ち帰りながら
味見してヤル♪

んんん

んん

んん

おね

んん

んん



オオ……ッ、オレのチンポが
ズルズル挿入ってイクッ♪

ババアの穴、イイゾ♪
いくらでもチンポ扱けル♪

（んほっ、おっ♥これが
ゴブリンのチンポ……!）

（ネチっく絡み付いてっ、
オマンガから離れない♥♥
こんなので奥まで突かれたらっ、
イっ…、イクっっっっ♥）

なんだ？
挿れただけデ
もうイッたのか？

んっ、んっ、んっ……
イっ……イっ……ない……わ！……♡

グッ……ん……ならば、
このまま進メ



ムキムキ

ムキムキ

ムキムキ

ムキムキ

ムキムキ

ムキムキ

ムキムキ

ムキムキ

ムキムキ

ムキムキ、この肉
テンポを呑み込んでイクゾ…♪
たまらなく、射精ル♪

（嘘…っ、もうイク♡♡♡
快樂を押さえられない
こんな状態でええっ♪♡♡♡）

ムキムキ

ムキムキ

ムキムキ





ビクッ

ビクッ

ビクッ

ビクッ

ビクッ

ビクッ

↑

↑

↑

(待って…っ♡射精なが…っ♡
チンポがビクンっビクン♡して
子宮までザーメン注がれちゃって…っ♡)

(んっほ♡やっぱ…っ♡これ♡♡
そういえば…っ♡コレも媚薬入り…♡
それをオマンコに直接…っ♡)

ビクッ

ビクッ

シグウウウツ、射精タ出タ♪
このババアの肉壺たまらん♪

…オイ、ちっとモ進んでねエツ
歩けっ、ババアっ

またコツチのパカチチを
やってやるろうカ



またおっぱいはいい♡♡

んほっ♡だらしなく垂れ下がったチチに
抱きつかれたら…っ、もっと垂れチチに
なっちやうんんんんんんん♡♡

かっ
かっ
かっ

かっ

かっ

かっ

かっ

かっ

んっ♡♡

んっ♡♡



ほおおおおおおお♡だめえ♡
お乳にぶら下がって…
チンポ扱くなんてえええ♡♡

グロム、うんま
チチやられてゴツチの穴も
チンポ扱いてきやがる♪



よし、チチぶら下げたまま歩け

んほっ♡おっ♡
オおおお~~~~~ンム♡

ムムム、イヤヤ
ケツサクだな♪

さっきまで威勢のヨかった
オンナがチチとマンコ弄られて
家畜になりやがッタ

んほっ♡おっ♡

家畜は家畜らしク
舐けてやらねエとなア……ゲヒ♪

んほっ♡おっ♡

んほっ♡おっ♡

んほっ♡おっ♡

んほっ♡おっ♡



んほ

んほ

んほ

んほ

んほ

んほ

んほ

んほ

んほ

んほ



愛

愛

愛

愛

愛

愛

愛

愛

愛

愛

着いたゾ、ババアっ

ズリ
ズリ

ぷりぽん

ズリ
ズリ

ズリ
ズリ

↑
↓

ヒヒヒ、早速
群がってきやがったナア

ズリ
ズリ

ズリ
ズリ

さす、「」からお楽しみ時間ダ



「アムダの生殖しか考えてナイ
「インクウヤのク」

「家畜のオマエには、ゴツタリだロア」

「あなたは高みの見物ってわけ……！
いいわ、教えてあげる……っ」

「私との通信が途絶えたら後続の
対魔忍がやってくるわ
もう動き出している頃でしょうね」

「あなたの仲間が私が殆ど始末したから
残党を狩るだけの簡単な任務よ……！」



「早く行かないとおっつ、残りの仲間も狩られるわよ……ふふふ、ゾオオおツツ♡♡♡」

「ふふふ、私が何の策もなく敵の奥窟に来ると思った……♡♡？」



カッパッ

カッ

カッ

グッ

カッ
カッ
カッ

カッ

カッ

カッ

カッ

カッ

カッ

オ…オデ
まだまだヤルよ

ビュッ

ビュッ

「そんな…ツ、射精したばかりなのに…
また勃起しているっつーア」

ビュッ

もっとチチ出せ

ハッ

「おまんこが…♡「おまんこ」を
支配されちゃっている♡♡」





「ゴゴゴ、射精々射精々♪
たまらねエッ♪」

「は——…♡は——…♡♡
んほおおおおおお〜…♡♡♡」

「ごんな…、弱いゴブリン♪
好き放題されるなんて…」

「あの親王に…」
「いつらが操られてる
おかげで食糧にならずに済んでるけど…っ」



「グヒョッ♪、次はオレがヤルッ♪」

「ムム、」のチチ肉が
ちよつと良きところだナァ」

キム

ム

キム

おほ♡

「んほおっ♡ふ…、踏まれりゅ♡
おっぱい乱暴に踏まれりゅ♡」

ズキ

キム

ム



ボスから呼ばれた

「のびんまゝでいいです」

ほっとケ、どうせ動けんだ回

あとでまたチンポ挿れてやるヨ、ババアっ

ビクッ
ビクッ
ビクッ

ビクッ
ビクッ
ビクッ

ビクッ
ビクッ
ビクッ



「はあ…、はあ……」

「どっちらゴブリンは行ったようね」

この洞窟に侵入者がやってきたことを察知したゴブリンは
手下を引き連れて迎撃に向かったのだ

「んんう…ツ♥少し体を動かすだけでも
感じちゃうっ♥でも…早く脱出しないと……」

「ザー、ザーっ」

「な、何…、何の音っ」



「ああんっ、そんな……！
子供たちが……こんな……っ！」



「やめなさいあなた達……!!」
「こんなお婆さんのお乳を吸ったって
おっぱいなんか出ないんだからあ……っ♡♡♡」



「な……い……お、おっぱい……
おちんちん挿んどる……」

おっぱい
おっぱい
おっぱい

「だ、ダメよ……！子供がそんな……おっぱいを乱暴に扱うなんてえ♡」

「そんなっ、激し……！♡んひい！♡ダメ……、イクっ♡♡♡♡」



ビュッ

ビュッ

ビュッ

ビュッ

ビュッ

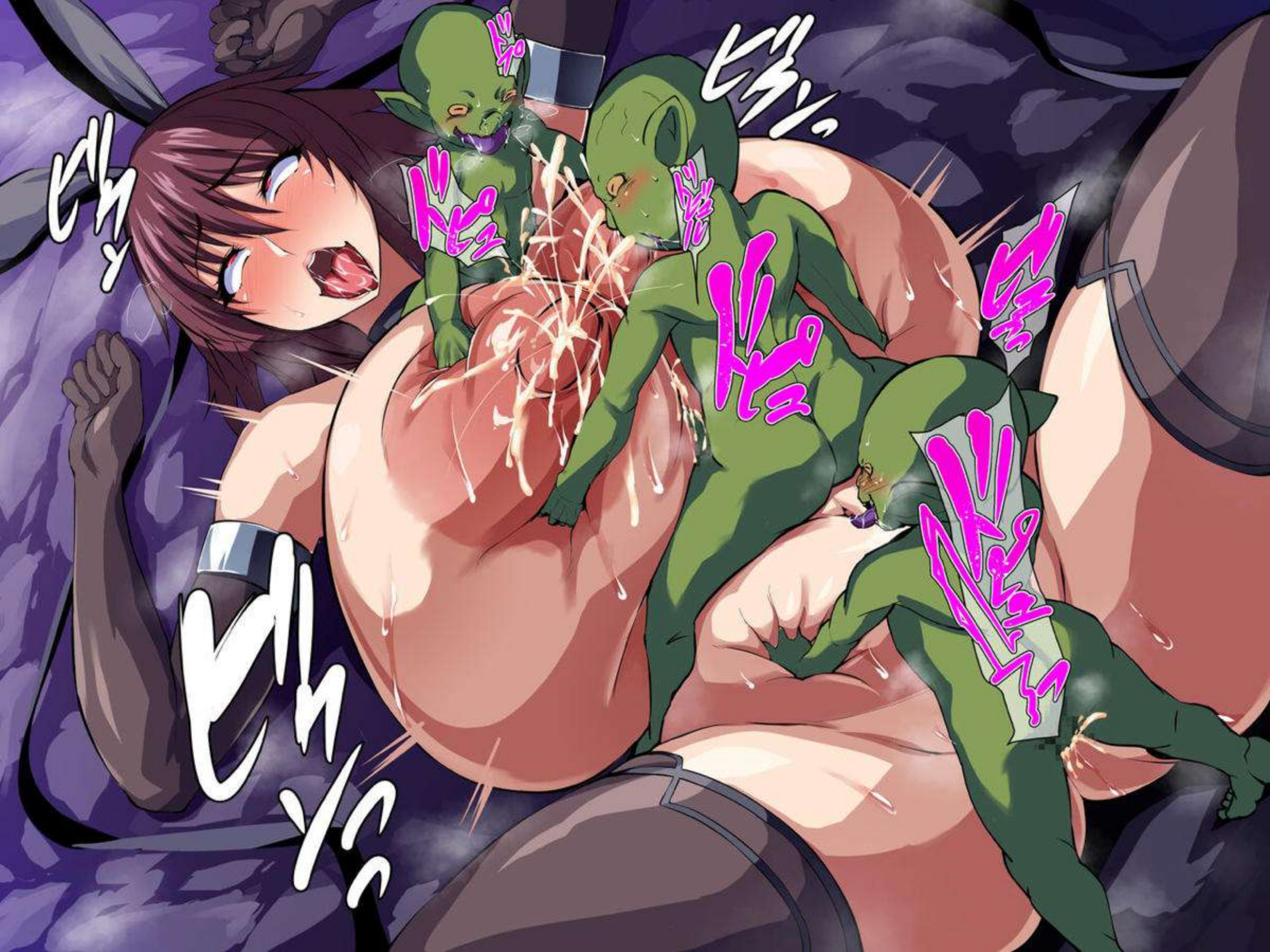
ビュッ

ビュッ

ビュッ

ビュッ

ビュッ



「はあ…はあ…、も、もう
射精して気持ちよくなったでしょ？」

「だから、そろそろ降りて頂戴…ね？
ボク達ならわかるでしょう？」

「はあ♥…はあ…♥乳首が「んなに」
勃起しちゃってるっ♥♥」

「射精を覚えたばかりの…、おっぱいで精通
しちゃった子供の前でえっ」





「んほおおおおおおおん♪ダメ…っ♪
ぞ、そんなトコ噛んだらあつ♪」

「見られてたんだわ…！ 乳首をこっつやると
おっぱい射乳すって…♪ 学習しちゃった♡♡」

「いく♡ バカ乳びゅーびゅー射乳して
イっちゃうっつっっっっっっっっっっっ♡♡♡」

「ほっ、ほっ、ほっ、おほおほおほっ☆」



「んっ、おひらひら☆」

ひ

な

び

ん

ん

「こんな子供に……♪
何度もイカされちゃったあん♡♡」



「ダメよ不知火
こんな子供におねだり要求するなんて♡♡♡」

「これは媚薬のせい♡♡
そのせいで冷静な判断が出来なくなってるだけよ♡♡♡」

「子供たちを振り切るだけの力はまだ残ってるわ…
これが最後のチャンス…♡♡♡」



「ああん♥ダメっ、ガマンできない♥♥」

だんぽん♥

「はあ…はあ…♪ボクたちい♥♥
もっとお♥もっ♪」のおっぱいで遊んでえ♪

「ほらありあなたがさっき囁んだせいで

「こ」がおチンチンみたいになっっちゃったわあ♪」

「ほらっ、こんなに揺らしちゃうわ〜ん♪

（ああん、何やってるの私♥これって魚を
誘き寄せるためのエサじゃない♥♥）」

「んほっ♪んほおっ♪早く
早く食い付いてえん♥♥♥♥」

「ほっ♪ほっ♥♥あなたたちもおお♥

おばさんの「」のつかい乳肉で

たくさんおっぱい遊びして頂戴♥♥」

もわっ♥

だんぽん

「こんな子供ゴラリンにまで媚びるなんて…♥
でも、おっぱいが気持ちイイから仕方ないのよ…
こんなにデカいおっぱいなのに…、あの人は全然
使ってくれなかったわ…だから快楽に気付けないのは
仕方なかったのよ♥♥」

「ア、アの子たち♡♡
抵抗されないのが分かった途端に
群がってきた♡♡♡」

「アのデカイ乳肉…アおっぱいが
自分のおもちやだって認識した♡♡」

「おっぱいの肉におチンチン擦りつけて
気持ちよくなってるアア」

「勃起した乳首も♡シンシンと噛み噛みで
イキっぱなしのアア」



「おほおおオ♡♡♡♡
鼻ラック♡♡♡♡」

「こんなモノ持ってるなんて♡
ブひっ♪ブヒイん♪♡♡♡
子供の前で豚面晒しちゃうん♪」

「ラゴっ、お♡おオっ♪子供がこんな♡
おばさんのヘンタイ豚面見て喜んでるっ♡♡♡」

「これヤバ♡♡クセになる♡
乳首おっ勃っ♡♡イクウっ♡♡♡♡」

グビ♡

グビ♡

ズ♡

ズ♡





「ハルカとユズ子♡♡♡ハルカ
イグマのハルマ〜♡♡♡」

はぁ♡

はぁ♡

はぁ

はぁ♡

はぁ♡

はぁ♡

はぁ♡

はぁ♡

「ほおくらボクたち♥おばさんのおつきいオツパイおもちやですよ〜」

「みんなのザーメンと、おばさんの母乳でヌルッヌルのお肉よ♥♥」

いっしょ♡

みんな♡

だだだだだ

ムクッ

「なに…やってるのかしら私…、こんな無様な格好で子供たちに媚び売るなんて…♪」

おっぱい

「♡♡…うんちをしゃぶって…♡…♡…♡」

ぽん♡

♡♡

♡♡

♡♡

♡♡

ぽん♡

「ぽん♡、「ん」をしゃぶって♡♡♡」

「ぽん♡、ぽん♡」



「イェーっ、……っ♡之腰を揺らすの♡」

ズクッ
ズクッ

ホッ
ホッ
ニヤッ
ニヤッ

オハイス
♡
♡

「子供の前でママ
下品なチチ揺らしてイェっちやん♡♡」



「あぁん♡こぼれ乳のしつぽだマ」

「飲んで♪おばさんの垂れ乳ミルク♪
たくさん飲んでえっん♡♡」

垂れ乳
最高

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ



「ああん♪またこんなモノ取り出してんや。」

「おっぱいに食い込ませてっや
お乳を搾り出すつもりね♡♡」

ズン

ズン

刺さ

ちゅぽ

いゅる

ちゅぽ

ホ

ホ

ニホ

オハ

おっぱい

ちゅぽ

ちゅぽ

ちゅぽ



「おはれんも♡おしとれに品な「ア」おはれん」

「はるの、はるの、はるの」

はるの

はるの

はるの

「こんな豚面で
ドスケベ乳揺らし♡」

おっ

おっ

おっ

おっ

おっ

おっ

おっ

「おっぱいひり出すだけの家畜よおっん」



「フコおはおっ♪んフコッ♪
ミニミニの乳肉におチンポ挿れてるっ♡♡♡」

「おチンポが気持ちいいのねっ♡
おばさんのデカチチがおマンコみたいに
チンポ抜いて気持ちイイのね♪」

んほお♡

チンポ

チンポ

チンポ

チンポ



「へっへっ腰振って♡
垂れ乳マンコでいっぱい扱いてええっっんや」

ほ

ほ

ほ

ほ

ほ

ほ



「2055♥f01J♥♥」

おっぱい

おっぱい

「おっぱいひり出し過ぎて
乳首が開いちちゃったわ〜ん♥♥」



「またおっぱいに群がって…♪
今度はなあに?♡」

「そのイライラしたおちんちんを
おばさんのおっぱいで擦るつもりね♡」

「…えっ? あっ♡だめっ!、そこは…あ、
挿入ると…じゃな…っ♡♡♡♡♡」





「そんなんっ♡♡♡♡
乳首におちんちん挿入ってる♡♡♡」

「んひいい♡おっぱいがバガバになったせいだわ♡
こんなの…♪、おちんちんに丁度いいオナホじゃない♡」







「うひっ♡♡もう射精した♡♡」

「きんぎょのおっぱいマン」が気持ちよくて
どぴんどぴんどぴぬお射精止まらないのね♡」

ドビ

ドビ

ドビ

ドビ

「もう、母乳とボクたちのザーメンで
おっぱいぬるぬるっ☆
気持ちいいオナホ出来ちゃった♡♡」

「ああん♡♡」の子達、また勃起してきた♡
おばさんの乳マン」壊されちゃっっ♡♡♡」





パンチ

パンチ

パンチ

パンチ

パンチ

パンチ

パンチ

パンチ

パンチ

パンチ

パンチ

パンチ

パンチ



「ひびっ…ひびっ♡んひびっ…☆」

「おっぱいは何度も申出しておいて…
まっぴらマンに出来ちゃったわぁん♪」

「んひびっ♪どろどろの母乳と
この子達のザーメンでグッチュグッチュの
気持ちいいオナホッポンポ入れ放題だわ♪」

「あへっ☆、そういえば
逃げようとしてたんだっ母…!」

「…こんな気持ちならゴッパをねんるのじゃ
何で逃げようとしてたのか(ゴッパ)」





「~~~~~♡~~~~~」

「ほおオ、ガキ共まで群がっているとハ」

「あんっ、帰ってきた♪ゴ布林様あ♪」

「グヒヒっ、どうやらすっかり家畜になったようだな」

「はい♪わらひはゴ布林様のおマン♪家畜です♪」

「好き放題おマンコハメて、ゴ布林様の赤ちゃんブリブリ産ませてください♪」

「このオマエの仲間達を見てもソシナことが言えるかな？」

「仲間…？、わざわざ食糧になりにきた肉人間の…ことなんて知らないわあ♪」

「それなりに鍛えているようですしお肉がたくさん付いてて美味しいと思います♪」

ザッ

ハカン

いっゆる

「ヒヒヒ…♪でハかつてのオマエの仲間を食いながらオマエを孕ますとするカ」

ヒヒッ、さっきより
ケツがデカくなったんじやないカ?

カッ
ッ

ズ
ズ

ズ
ズ

ズ
ズ

ん
ん

ん
ん

ん
ん

ん
ん

たっぷり唾液を浴びたおかげで

ぶりんぶりんの
駄肉になっちゃいましたあ♡♡

ズ
ズ





あは

あ

くさ

いんげん
いんげん
いんげん

「う、うで♪
ケツ穴フリストオオーん♡♡♡」

「すっ!いのぶち込まれた♡♡」

「んぎにーいーいーいーん☆」

ア
キ
キ

ポ
ポ

ウ
ウ

ウ
ウ

ウ
ウ



「オオ、ババアのケツの中
ヌルヌル♪気持ちイイゾ♪」

「おめで、アレは
どーかな？」

ヌル

ヌル

「そ、そ」♡♡
その少し奥です♡♡」



「『ヒッ♪ 見つけタ
オマエの袋♪』」

「それですっ♪」

「ゴブリン様専用のオナホ♡♡」

「んひい♡ 思い切りガシガシ扱いてくらひゃい♪」

ガシガシ

ほ

小ほ

くちゅ♡

おの♡♡

「JUMBOーニンゲンのマン」驚掴み♪♪
「これだからニンゲン犯すのヤメられない！」

「んほおおおおおおおっ…
子宮掴まれてっ♡
オナホ「キ」されてるっっっっ…」

んほっ

おほ

「イク」「れやバっっっ…」

オホ

オホ

「…JUMBOーニンゲンのマン」





カ
ン
ン
ン

カ
ン
ン
ン

カ
ン
ン
ン

カ
ン
ン
ン

カ
ン
ン
ン

「あ♡くる♡赤ひゃん産まれひよおあ〜♡♡♡」



「はぁ♡はぁ♡

赤ちゃん…、産まれそうです♡♡♡

「家畜がゴラリン様の赤ちゃん
ぶりぶり産むと」ろ見てください♡♡♡」

へー♡

んー♡



「おっほおっほ☆」

「トロっ、タダ見てるわけないだろ？
産まれる直前までマンコ犯ス」

「オマハもマンコ犯さるだろ？」

おほ

んふん

カッ

あ

ほ

か

ん

オハ

ん

「はい、出産直前のババアマンコマ
ズボズボ犯して赤ちゃんにザーメンぶっかけしてほしいですな」

「おっほおおお♡

腹♡ぶっ叩かれてイクっ♡♡♡♡♡

「それイっちゃうっ♡

んほお♡もっとおお♡イク♡

ブッ叩いてくらひゃいい♡♡♡

「こんなのでイキやがるとハ
とんだ変態ババアだな♪ゲヒャ♪」

ちゅぽ♡

「オラっ、どうだババア♪」

ちゅるるっ

ちゅぽ

んひっ♡♡♡

「きほぢいいいいっ♡♡んへ☆

出産直前のポテ腹♡マン♡と乳犯されへ

めちやくちゅ♡されるの気持ちいいっ♡♡♡

「」のアクメやっぱ♡ニプルファリスト♡
乳マンコがばがばあゝ☆」

あゝ
あゝ
あゝ
あゝ
あゝ

あゝ
あゝ

「」のアクメやっぱ♡ニプルファリスト♡
乳マンコがばがばあゝ☆」

あゝ
あゝ

あゝ
あゝ

あゝ
あゝ





ズポーン...
おほおほ☆

どろろ、どろろ、
へえ...、へえ...、んへえ☆

んほお...、乳マンコアクメすっ！...♡♡

ああ〜ん♪ お乳がばがばあ♡

赤ちゃんもお♡お母さんの
下品アクメで喜んでる♡♡

ひひ

ひひ

早く産まれてこのバカ乳
飲みたがってるうっ〜ん♡

ひひ

そんなんカ?



「おっほ、陣痛きたあ♡♡
んひっ♡激しっ♡」

ゆきかぜの時よりずっと激しいっ♡♡」

「早くお腹から出たくて暴れ回ってるな。」





「産道ズリズリ♪マンコアクメイク♡
出産アクメイっちやうっつー♡♡♡」

「♡♡♡産道♡♡♡マンコ♡♡♡」

ゴブリンに捕らわれ、繁殖のための母胎にされた対魔忍 水城不知火——。
最高の母胎を手に入れ、さらなる繁栄に歓喜するゴブリンであったが
不知火から産まれた仔は想像を遥かに超える力を持っていた。

仔ゴブリンは急速に成長し、大人のゴブリンを上回る体躯になった。そして——、

「ヒィ……ッ！来るナ！パケモノ……ッ！」

「グルル……、ハラヘッタ……オマエモ喰ウ」「ヤメ……ッ」

ゴシヤ！

「コイツラ チビで身がナクテ マズイ」「モウ全部喰ッテマッタ」

仔ゴブリンによって食い尽くされたゴブリンの群れ。だが、この怪物の食欲は尽きない。
しかし仔ゴブリンは食糧を増やす方法を知っていた——。

「グルル……ッ、早く次ノ食糧出せ」

「おひいひいひいひいん♡」

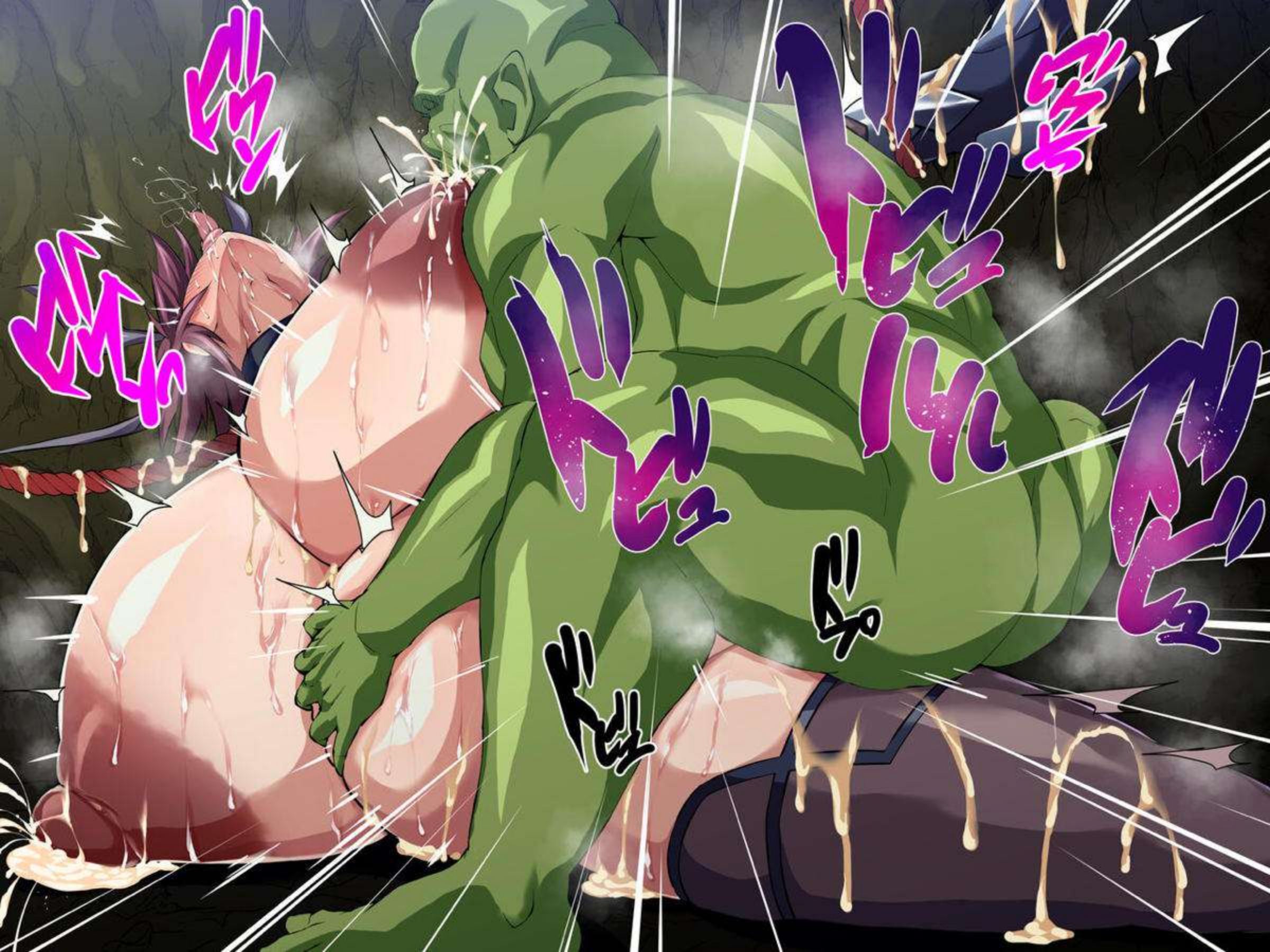
また♡チンポきたあ♡ズポズポおっっ♡」

子供によつて繋がれた不知火。
彼のために繁殖を繰り返すだけの存在となっていた。

ズポッ
ズポッ

ズポッ





ガクッ、ガクン、ゴクン...

「クーン...クーン ぷぷぷぷ☆」

「早くオレの食糧出せ」

ギューウウウウウウウッ!!

「おい!ほおほおほお☆」

「潰れりゅ♥赤ちゃんでパンパンの
お腹潰れちゃうんないんないんないん...!!♥♥♥」





仔ゴブリンによって全滅したゴブリンの洞窟。
それにより侵入が可能となった対魔忍部隊により不知火は救出される。

強大な力を持って産まれた仔ゴブリンだったが、救出部隊の一人
斬鬼の対魔忍 秋山凜子によって倒される。

「おそらく、ゴブリンの親玉が持っていた魔力と不知火さんの対魔粒子が
結び付いた事であんな怪物が産まれたのだらう」

並の対魔忍では到底敵わなかったであろうことが
凜子先輩の疲労具合から見てとれた。

















































































































































































































































